

本編

凡例

1. 本史の記述は、原則として平成21年1月までとした。
2. 本文は原則として新かなづかいを用いた。
3. 数字は固有名詞を除いて原則としてアラビア数字を用いた。但し、引用文は原文のままにした。
3. 人名は原則として敬称を略した。
4. 役職名は原則として当時のものとした。
5. 「評議員会長」は平成20年5月から「評議員会議長」に呼称変更した。

序 章 創立前史

1. 種痘所の開設

福祉の精神と高度医療

社会福祉法人三井記念病院は、三井家による100万円(現在の約10億円以上ともいわれる)の寄付により、無料診療を行う民間唯一の病院として明治42年(1909)3月21日に開院した財団法人三井慈善病院を前身としている。この三井慈善病院は東京帝国大学(現東京大学)医科大学附属第二医院跡に建設され、各科医長は同医科大学教授、助教授、講師が就任するなど、同医科大学と深い関係があったため、まず同医科大学の概略を述べるところから本書の叙述を始めることとする。

東京帝国大学医科大学は、現在の東京大学医学部の前身にあたり、創立は安政5年(1858)5月7日とされている。これは、当時の江戸お玉ヶ池に種痘所が開設された日にあたる。この種痘所は蘭学医に好意的だった勘定奉行・川路聖謨^{かわじとしあきら}の屋敷の一部を借りて開設された。外国からの医術を禁止していた幕府を動かし、種痘所設立へ導いたものは、長崎で多くの蘭学者を育てたシーボルトの弟子である大槻俊斎、伊東玄朴ら蘭学医たちの熱意であった。事実、種痘所開設により天然痘に苦しむ多くの小児が救われている。また、種痘所は医学を志す若者の教育機関としての役割も果たした。蘭学医82名の出資により設立された私的機関は、やがて幕府に接收されて西洋医学所となり、維新後も明治政府に引き継がれ、幾度かの名称変更を経て、現在の東京大学医学部に至っている。

「お玉ヶ池」と「神田和泉町」

桜ヶ池とも呼ばれ、不忍池よりも大きな池であったと伝えられる「お玉ヶ池」の名の由来は、かつて2人の男性からの求愛に悩んだ神田松枝町のお玉が身投げしたという伝説による。現在、都営地下鉄岩本町駅から小伝馬町駅に向かう東京都千代田区岩本町

2丁目5番9号の鰻屋「ふな亀」入口の前の歩道に「お玉ヶ池種痘所 東京大学医学部」の標柱と医学部発祥の由来を刻んだ黒御影のレリーフがある。これは昭和36年(1961)11月3日に東京大学医学部が建立したものであり、記念碑の除幕式では地元の木遣り歌の歓迎があったといわれている。



東京大学医学部が建立した記念碑

このレリーフには次の文字が刻まれている。

一八五八年・安政五年五月七日
江戸の蘭學醫たちが資金を出し
あってこの近くの川路聖謨の屋
敷内に種痘所を開いた。これが
お玉ヶ池種痘所で江戸の種痘
事業の中心となった。ところがわ
ずか半年で十一月十五日に類焼
にあい下谷和泉橋通へ移った。
この種痘所は東京大學醫學部の
はじめにあたるのでその開設の
日を本學部創立の日と定め一九
五八年・昭和三十三年五月七日
創立百年記念式典をあげた。
いまこのゆかりの地に由来を書
いた石をすえまた別に種痘所跡に
しるしを立てて記念とする。

一九六一年十一月三日
昭和三十六年文化の日
東京大學醫學部



お玉ヶ池種痘所跡の碑



東京帝国大学医学部附属第二医院所在地図(明治16年)

また、現在三井記念病院が建つ神田和泉町にはかつて藤堂和泉守上屋敷があり、藤堂家が代々名乗っていた「和泉守」から町名が「神田和泉町」になったとされる。明治維新後、新政府はこの屋敷跡地に東京医学所を設置した。藤堂家が治めた伊勢国津藩(現三重県津市)と三井家の家祖・三井高利

が生まれた伊勢国松坂(現三重県松阪市)、三井記念病院が建設されている藤堂家跡地(現東京都千代田区神田和泉町)と高利が開いた呉服店・越後屋(現東京都中央区日本橋本石町＝日本銀行新館の一角)は、いずれも非常に近い距離にある点に深い縁が感じられる。

2. 東京帝国大学医科大学附属第二医院跡

種痘所から第二医院へ

開設から半年後の安政5年(1858)11月15日、早朝に神田相生町から出た火事により種痘所は類焼し、その後、蘭学医たちの募金によって翌年下谷和泉橋通り旧藤堂和泉守上屋敷北(当時伊東玄朴邸の一部)に仮小屋を建てて種痘事業を継続した。万延元年(1860)10月14日、幕府はこの種痘所を直轄とし、官立種痘所の初代頭取に大槻俊斎が就いた。官立種痘所は文久元年(1861)10月25日に「西洋医学所」、文久3年(1863)2月25日に「医学所」と改称した。文久2年(1862)4月9日に大槻俊斎が死去すると、第2代頭取に緒方洪庵が命ぜられた。

緒方洪庵(1810~1863)は、医師・蘭学者で、天保9年(1838)、大坂(現大阪府大阪市)に適々齋塾(適塾)を開いた人物である。この適塾からは福沢諭吉をはじめ、大村益次郎、橋本左内、長与専齋などの人材が輩出された。また、緒方洪庵を慕い種痘所設立に参画した蘭学医の1人が適塾で福沢諭吉と同級だった幕臣・手塚良庵であり、その曾孫は漫画界の大御所・手塚治虫である。



東京帝国大学医科大学附属第二医院

明治元年(1868)7月20日に新政府は横浜の軍陣病院(野毛山軍陣病院)を下谷藤堂邸に移し、医学所をこれに含めて「大病院」と称した。明治2年(1869)2月、大病院は、「医学校兼病院」、「大学東校」へ改称された。この間、鎮将府、東京府、軍務局を経て明治2年(1869)1月に東京府の所管となった。明治4年(1871)7月18日、大学が廃止され「文部省」が新設された。大学東校は「東校」に改称され、所管は文部省となった。翌明治5年(1872)8月3日文部省は学制を定め、学区制を採用し東校は「第一大学区医学校」と改称され、明治7年(1874)5月7日には、学制



「臨時増刊風俗画報」が東京帝国大学医科大学附属第二医院を紹介(明治33年)

改革により「東京医学校」と改称された。この後、明治10年(1877)4月12日に東京帝国大学が創立され、東京医学校は東京帝国大学医学部となった。明治11年(1878)11月、神田和泉町(もと下谷和泉橋通)の大病院跡に東京帝国大学医学部附属医院を開き、通学生の臨床教育の場とした。明治15年(1882)7月1日、本郷の医学部附属医院を「第一医

院」、神田和泉町にあるものを「第二医院」として、両院に院長格を置いた。明治19年(1886)3月1日、帝国大学令の公布によって、東京帝国大学医学部は帝国大学医科大学となった。明治30年(1897)、帝国大学は東京帝国大学に、帝国大学医科大学は東京帝国大学医科大学に改称された。その後、大正8年(1919)2月に帝国大学令が改正され、東京帝国大学医科大学は東京帝国大学医学部となった。

第二医院の全焼



「風俗画報」が掲載した東京帝国大学医科大学附属第二医院火災の様子(明治34年)

東京帝国大学医科大学附属第二医院は明治34年(1901)1月29日早朝、消毒用ホルマリン洋灯から出火し、全焼した。入院患者96名中、焼死19名、驚死2名に及んだ。この惨事は斎藤茂吉の随筆『三筋町界限』にも記載されている。同地はその後、東京帝国大学医科大学の運動場となり、これを三井家は入手した。三

井家は、明治39年(1906)9月25日に、まず三井慈善病院を設立すべく診療業務、医術の研修及び看護婦の養成を東京帝国大学医科大学に委託した。

そして、お玉ヶ池種痘所の社会福祉の精神は、東京帝国大学医科大学附属第二医院を経て、明治42年(1909)3月21日に開院する財団法人三井慈善病院へと引き継がれていくこととなる。

つまり、東京大学医学部の創立は、わが国最初の広く一般大衆を対象とした公衆衛生活動といえる。三井記念病院は、この社会福祉の精神と高度な医療を受け継ぎ、平成21年(2009)3月21日に開院から100年を迎える。